

日本におけるオルテガ研究の進展

The evolution of Ortegian studies in Japan

木下智統

Tomonori KINOSHITA

1. はじめに

ホセ・オルテガ・イ・ガセット (José Ortega y Gasset 1883-1955) は、20世紀のスペインを代表する哲学者、思想家である。1936年に彼の名が日本で初めて紹介されて以降、今日に至るまで数多くの研究書、研究論文等が発表され、今なお研究が進められている。その内容も多岐にわたっており、オルテガ思想の幅広さを裏付けるものとなっている。

本論考では、オルテガに関する日本で最初の論文が発表された1936年からオルテガがその生涯を終える1955年までを第一の区切りとして、この期間におけるオルテガ受容の流れを概観し、その後、同様に1956年から1975年までの20年を第二の区切りとして、わが国において、この期間に展開されたオルテガ研究の流れについて検討を行った。戦後の日本社会において、オルテガの思想が受け入れられた過程、その特色、そして他の時期との相違点について検討することにより、日本におけるオルテガ思想の受容の特質に迫ることを目的としている。

2. 1955年までのオルテガ研究について

1936年、桑木巖翼が「西班牙の思想家ホセ・

オルテガ・イ・ガッセット」¹⁾でオルテガを日本に紹介したことを契機として、日本におけるオルテガ研究はその始まりをみた。その後、池島重信をはじめとして、幾人かの研究者たちがオルテガ思想の解明と普及に努めたが、その数は非常に限定されたものであった。

ここではそうした日本におけるオルテガ研究の過程について、1936年からオルテガが他界する1955年までを一つの区切りとして捉え、この期間の研究者たちや研究傾向、またその意図について整理しておく。

桑木に続いて、オルテガ思想を研究したのは池島であった。彼は初期オルテガ研究の第一人者としてオルテガ著作の翻訳やオルテガ思想に関する論文の執筆を進め、その後のオルテガ研究の土台を作ったともいえる。また、オルテガを哲学者、思想家としてのみ解釈するのではなく、学者、ジャーナリスト、そして政治家など、オルテガが多面で活躍していた事実を日本に紹介した。こうした池島の活動によってオルテガの名は少しずつ広まりを見せたのであろう。その後、池島以外にも

1) 本論考の引用に際しては旧仮名遣い、旧字体はそれぞれ新仮名遣い、新字体に改めている。なお、表題については変更を加えていない。

堀秀彦をはじめとする研究者らがオルテガ著作の翻訳を進め、オルテガ著作に日本語でふれることのできる状況が少しずつ整備されていった。なお、そうした中でオルテガの名をヨーロッパ、アメリカにまで広めた彼の主著、『大衆の反逆』²⁾も翻訳されたのであった。

このように、この時期にオルテガについて研究、もしくは彼の著作を翻訳した人々は非常に少なく、人数からみれば十人にも満たない、一部の限られた人々だけであった。桑木が最初にオルテガを紹介してから約20年、日本におけるオルテガ研究はまだまだ始まったばかりであった。だが、彼らの研究、翻訳作業からいくつか指摘できる点も浮き彫りとなった。その内容を三点に分けて、指摘しておきたい。

まず、第一点目として日本の研究者たちがどのような要因からオルテガに興味を抱くようになったのかが明らかとなった。それは、オルテガがドイツで高い評価を受けていたためである。当時の日本ではドイツ哲学研究が盛んであり、ドイツは「哲学の王国」とまで評された。そうしたドイツで高い評価を受けていたオルテガに興味を抱いたのは自然の流れといえる。オルテガの著作はドイツ語のみならず、多くの言語に翻訳されたが、日本の学問状況に鑑みるとドイツ語に翻訳されたことは、日本でオルテガの著作にふれる機会へと直接的につながったため、多くの日本人研究者たちがオルテガ著作にふれることが可能となった。オルテガがドイツ以外で評価され、ドイツ語以外の言語でしか翻訳されなかったとしたら、日本でのオルテガ思想の受容にはさらに多くの時間を要したことであろう。

第二点目にオルテガが持っていた思想の広

がりとその思想を表現する際に用いた、彼の卓越した文体が多くの人々を引きつけたことが指摘できる。オルテガは哲学のみならず幅広い分野について深い見識をみせていた。この点については、池島の言葉がその事実を最も適切に表現している。

オルテガは歴史を決定したあらゆる芸術作品に対して行き届いた理解を示す一方、晦渋と言われているドイツの精神科学に対しても精密な知識をもっている。また深奥を誇る東洋思想への悟入があるかと思えば、感性の極致を誇るフランス文化に対する味解も容易に他の追随を許さぬものがある³⁾。

このように、オルテガの思想は哲学の分野だけに偏ったものではなく、幅広い分野に深く思慮を巡らせたものであったために、哲学以外の分野の人々も引きつけたのであろう。その一人が先に挙げた堀である。彼はオルテガの『恋愛論』を翻訳したが、書名からも推測できるように、これは純粹に哲学の分野に関する内容だけを扱っているわけではなかった。その意味で、『恋愛論』はオルテガの思想の広がりをもっと示した著書と言っていだろう。また、忘れてはならないのがオルテガの卓越した文章表現力である。この点についても堀をはじめ、多くの人々が最大級の賛辞を送っている。幅広く深い思想を卓越した文体で読み手に伝える、という最も難しいことがオルテガの書では展開されていたため、さらに広く深く人々を引きつけたのであろう。

最後に、第三点目として日本の社会情勢がオルテガ思想の受容へと結びついたことが指摘できる。『大衆の反逆』を翻訳した樺俊雄

2) 書名の邦訳に関してはいくつかの表記があるが、本論では現在において最も一般的となっている、「大衆の反逆」を用いる。

3) 池島重信訳『現代の課題』、p.2.

は、オルテガが大衆社会として現代を捉え、その状況を多角的に批判し、その批判が20年以上を経過してますます現実的になっている点について、オルテガの叡智への驚嘆ぶりを述べている⁴⁾。つまり、『大衆の反逆』は、ヨーロッパやアメリカが対象となっていたにもかかわらず、当時の日本社会の現状と照らし合わせても効力のあるものだったことがこれにより明らかである。同様のことは同じく『大衆の反逆』を翻訳した佐野利勝も述べている。彼は敗戦後の日本と危機に直面している西欧とを結び付けて、同様の立場として捉えた。つまり、『大衆の反逆』で展開されている批判を自分たちへの批判として捉え直したのである。危機に直面しているという同様の立場にありながら、その状況を打破すべく奮闘するオルテガの存在は佐野に大いなる刺激を与え、日本社会に対して警鐘を鳴らす知的活動へと向かわせた。また、戦後の復興における思想の重要性を説いた研究者として前田敬作も挙げておきたい。彼は敗戦後の日本の立て直しという困難な課題に直面していた当時であって、とかく優先されがちな物質的、経済的な面の復興だけではなく、精神的、文化的な面での復興の重要性を説いた。オルテガが批判した、思想を欠いた社会と日本がならないよう、前田も知的活動を行ったのである。以上のとおり、オルテガの思想は哲学を基底として展開されたからこそ、彼の社会批判は地域や人種を超え、日本においてもその有用性を見せた。

3. 1956年からのオルテガ研究について（研究論文の観点から）

1956年以降の日本におけるオルテガ研究はそれまでとは大きく異なったものとなってい

る。ここでは1956年から1975年までの期間に発表されたオルテガ思想に関する研究論文の中から主なものを取り上げ、その流れをたどってみることににより日本におけるオルテガ思想受容の進展を明らかとしたい。

1955年までに刊行されたオルテガ関連の論文の内容をおおまかに整理してみると、中心となったのはオルテガ自身について紹介した論文であった。つまり、オルテガの思想について研究したものはまだ希少であった⁵⁾。しかし、こうした流れは1956年以降、少しずつ変化を見せる。

1956年の原佑の論文、「ホセ・オルテガ・イ・ガセットの思想」はそれまでの論文とはふたつの点で大きく異なっている。ひとつは純粋に哲学的アプローチからオルテガの思想を解明しようとした点である。この種の論文はそれまでには存在せず、オルテガ研究が一步、先に進んだことを示している。もうふたつは論文の掲載先である。この論文はそれまでの論文とは違い、哲学会の会誌に掲載された⁶⁾。このことは、オルテガ思想が本格的に日本の哲学の分野でも認知された⁷⁾、と理解できる点で大きな意味を有している。

また、1957年に奥村が著した論文⁸⁾は、「書評」という見出しになってはいるものの、十六ページにも亘り、オルテガ思想について丹念な検討を行っている。その構成は、まず、オルテガの著作が発刊された時期と日本でそ

5) 桑木巖翼の「西班牙の思想家ホセ・オルテガ・イ・ガセット」くらいであろう。

6) 原 佑「ホセ・オルテガ・イ・ガセットの思想」。

7) しかし認知とは言っても原自身、「オルテガが形成した思想を、全面的とは言わず、たとえ重点的にせよ展開してみせるということには、様々な困難がともなうであろう（旧字体は新字体に筆者が改めた）」と述べ、オルテガ思想の広さと体系の欠如をその理由に挙げている。こうした理由から、哲学会の会誌でオルテガが扱われることは現時点まで、この一度だけである。

8) 奥村家造「Critique of Vital Reasonの一側面」。

4) 樺 俊雄訳『大衆の蜂起』, p.255.

これらの著作が翻訳された時期との時間差について、当時の日本社会の情勢も踏まえた考察を展開した。そして次に、それまでに著されたものと同様に、オルテガの人物紹介についても最小限扱い、その後、オルテガの生・理性哲学について綿密な検討を行った。このように、奥村の論文においてオルテガの人物紹介は全体からすると一部分であり、大半はオルテガ研究へと目が向けられている。それまでの論文がオルテガの人物紹介を中心としていたことを考えるとこの論文もまた、原と同様、オルテガ研究が少しずつ進んでいることをうかがわせる。

ここまで、二つの論文を取り上げたが、これら二つの論文はすでに述べたとおり、それまでのものとは違い、オルテガの思想を考察対象として論を進めている。だが、どちらの論文もオルテガ思想全体を包括的に考察対象としたため、個別の分野に対して綿密な検討が加えられたわけではない。

幅広い分野にわたっているオルテガ思想。このことが現在でもオルテガ研究が続けられている一つの要因とも言えるが、1960年代に入ると、そうした幅広い分野のひとつひとつに光が当たり始めるようになる。つまり、単なる人物紹介から包括的な思想解説へと進み、そしていよいよ個別分野についての研究が進んでいくのである。まず、第一に挙げられる研究者はアンセルモ・マタイスであろう。1960年代のオルテガ研究を進めた中心人物と言って過言ではない。マドリード生まれながらも卓越した日本語運用能力を有していたマタイスは、次々とオルテガに関する研究論文を発表し、オルテガ研究の幅を広げたとと言える。彼が発表した論文の中身をキーワード別で見ると、「オルテガの哲学」、「オルテガの倫理思想」、「オルテガの時代批判」、そして「オルテガの大学論」というように、オ

ルテガの紹介やオルテガの思想全般について扱っていたそれまでとは違い、個別の分野に焦点が当てられている。こうしてそれぞれの論文で展開された鋭い考察が、日本におけるその後のオルテガ研究の礎となったことは間違いない。マタイスははそれまでの論文がドイツ語版のオルテガ著作を基にして、研究を進めていたのに対し、マタイスは原典、及び本国スペインで進められていたオルテガ研究を基に自らの研究を進めたのであった。また、彼が論文⁹⁾で触れているように、スペインでは1940年以降、オルテガ哲学の解釈を巡ってふたつの立場が対立し、激しい論争を繰り広げた。こうした論争は研究面において、大きな恩恵をもたらすが、そうした最新の研究成果を踏まえた研究をマタイスは展開したのである。このように、マタイスのオルテガ研究における貢献は大きく、それは1970年代においても同様であった。彼は新たな論文執筆に加え、それまでの論文をまとめた書物の出版も行った。

以上のとおり、マタイスはオルテガ思想の広がりを示すために、数多くの研究成果を残したが、その中でオルテガ思想の広がりについて次のように述べている。

マリアスが述べているように、オルテガの思想は一見してさまざまなテーマについての、多少の差はあれ、直観的な思いつきや考えの集積に見えるが、実は厳密な体系的連関を持っているのである¹⁰⁾。

このように、マタイスがオルテガ思想の広がり人々に提示した理由は、ひとつの分野

9) マタイス, A. 「初期オルテガ哲学の形成—フリアン・マリアスの新刊書『オルテガ—1・環境と使命』をめぐって」。

10) マタイス, A. 『ウナムーノ、オルテガの研究』, p.233.

からでは見通すことが困難な「厳密な体系的連関」を掴み取るための手助け、と言っても過言ではないであろう。オルテガは自身の思想分野のひとつひとつに、万人向けの明快な思想体系を提示しなかった。そのために、「直観的な思いつきや考えの集積に見える」オルテガ思想の解説は大きな意味を果たしたに違いないだろう。

さて、マタイスが示したオルテガ思想の幅広さは、彼だけではなく、他の研究者たちによっても少しずつ確立されていった。この時期に扱われ始めた分野を簡単にみておくと、まずは政治学であろう。大谷は、本質的に人間が真摯に政治を行うことは可能か、という問いに関する考察において、オルテガの思想をその一部に取り上げた¹¹⁾。政治学の分野についてオルテガの思想が論文で取り上げられたのはこれが最初と思われる。

また1970年にはオルテガの芸術面への考察が研究論文において扱われている。ベラスケスを考察対象とした遠藤の論文¹²⁾は、オルテガ思想が芸術分野にも及んでいたことを示すものとなった。実際、オルテガは芸術の分野についても数多くの考えを書き残しており、これらが少しずつ日本でも扱われ始めたことを意味している。こうした流れの中、1973年に千代田が著した論文¹³⁾はオルテガ思想の幅広さだけを示すではなく、その深さをも示すものとなった。三人の思想家の歴史主義を比較検討したこの論文は、第一義的には歴史学という分野にもオルテガの思想が及んでいたことを示している。しかし、オルテガは著作の中で度々、歴史主義を基に考察を進めてい

るように、歴史主義はオルテガ思想全体を貫く、ひとつの柱であった。『大衆の反逆』で展開されたオルテガの考察の根底にも、生・理性哲学同様、歴史主義は欠かすことのできない要素となっている。こうしてみると、オルテガ思想の幅広さを担っているひとつひとつの分野は、それぞれ独立したものではなく、相関関係を持っていることが明らかとなるだろう。マタイスの言う、「体系的連関」が彼以外の研究者によっても少しずつ明示され始めたことを千代田の論文は示している。

以上のとおり、オルテガが持つ幅広い思想について、それぞれの分野ごとに研究が進み始めたのが1970年代前半までの動きであった。最後にひとつ、オルテガ思想の新たな展開について検討を行い、この章を終えることとしたい。1975年、宮澤が出版した論文¹⁴⁾にはアメリカ教育学においてオルテガ思想がどのような役割を果たしていたかを指摘している。

アメリカ教育史の射程を拡大するのに貢献しているものに、なお、個々の人物研究と比較教育史研究の二つがある。いずれも、これまで十分に手がけられていたとはいえない領域である。人物研究は、一方では教育思想史研究と結びついて隆盛に向い、なかには、オルテガ・イ・ガセットのような、従来教育思想史の書物にあまり登場してこなかった人物を対象にしたすぐれた業績もある¹⁵⁾。

オルテガは、専門化に傾き過ぎた状況を良しとせず、一般教養の重要性を説いたが、こうした思想についてはすでにマタイスがオル

11) 大谷忠教「政治理論の基礎としての“人間性”論(試論その二)」。

12) 遠藤恒雄「ベラスケス初期作品の一考察—ボデゴネス絵画の意義」。

13) 千代田謙「歴史主義の三途—クローチェ・ホイジンガ・オルテガ」。

14) 宮澤康人「アメリカ教育史像の再構成に向けて：60年代・70年代アメリカの教育史研究」

15) 同上、pp.8-9。

テガの大学論をテーマとして論文¹⁶⁾を著している。そのため、宮澤の論文は日本において未だ研究されていないオルテガの思想分野を初めて提示したことにはならない。宮澤の論文が示したオルテガ思想の新たな展開とは、本来、オルテガが最も研究される分野（例えば、哲学や社会学など）とは違う分野の研究が他国で進められ、そしてそのことが日本で紹介されていることにある。このことは、オルテガ思想が持つ幅広い分野のひとつひとつに研究を進めるに値する思想的体系の存在を示すことにつながったのではないだろうか。少なくとも、オルテガがその名声を確立した分野とは異なる分野において、さらなる名声を確立している様子を日本に紹介した点で、宮澤の論文にはそれまでの他の論文にはなかった新しさがあると指摘できる。

4. 1956年からのオルテガ研究について（翻訳、研究書等の観点から）

前章で扱った研究論文の場合と同様、ここでは1956年から1975年までの間に刊行されたオルテガ著作の翻訳、並びにオルテガに関する研究書から主なものを取り上げ、その流れをたどってみる。

1953年にオルテガの主著『大衆の反逆』が出版されて以降、オルテガの著作は次々に日本語へと翻訳されていった。それらの中の主な作品を挙げてみると、『ドン・キホーテに関する思索』、『芸術の非人間化』、そして『大学の使命』などが1960年代の終わりまでに翻訳された。また、1969年から1970年にかけては、全八巻本のオルテガ著作集が白水社より発刊された。オルテガ著作の主要な作品が収められたこの著作集の登場により、日本語によるオルテガへのアプローチが可能となり、

より一層、オルテガの幅広い思想分野について研究が進められた。

また、オルテガ著作の主要作品の翻訳本の出版と並行して、オルテガが書き残した無数の短編物も日本語へと翻訳されていった。そうした中、日本におけるオルテガ研究に大きな貢献を行ったのが、先に挙げたマタイスである。すでに述べたように、マタイスのオルテガ研究における貢献は研究論文の発表に限らず、オルテガ著作の翻訳や研究書の出版などの面においても精力的に活動を行っていた。ここでは彼のそうした活動の中でも、日本におけるオルテガ研究に新たな広がりをもたらした点について指摘しておきたい。それはオルテガとウナムーノの関係性について、という日本においては未だ未開拓の研究分野を提示したことである。ウナムーノとオルテガの名が同時に取り上げられたものとして、最も古いものでは、桑木の論文¹⁷⁾が挙げられるが、それは具体的に両者の関係性について扱ったものではなかった。マタイスは両者が交わした書簡の翻訳と、両者の出会いについて解説した文をひとつにして出版した。この著書により、他言語を介さず両者の関係性という新たな分野への接近が可能となったのである。

マタイスによれば、現代スペイン哲学の構築について考えた時、常に人々に思い浮かべられる人物はウナムーノとオルテガであるが、日本における両者の研究状況には進展面において違いがあった。すでにみたとおり、オルテガ研究はオルテガが持つ幅広い思想分野のひとつひとつへと研究が進展しており、著作集も刊行されていた。それに対し、オルテガより早く日本へと導入されたウナムーノであったが、ウナムーノ研究が進展をみせる

16) マタイス、A.「オルテガの大学論に就いて（特集・大学論）」。

17) 桑木巖翼「西班牙の思想家ホセ・オルテガ・イ・ガッセット」。

までには多くの時間を要していた。しかし、1970年代に入り、ようやくウナムーノ著作集が法政大学出版局より刊行され、その状況は変わりつつあった。

さて、両者の関係を比較研究できる環境が整備され、その研究が進むと一体、何がもたらされるのであろうか。マタイスはまず、ウナムーノ研究がオルテガ研究ほど進んでいなかったことに対して、「オルテガの理解にあっても、またスペイン思想の把握に際しても一つの障害となっていた」¹⁸⁾と述べた後、その真意を次のように詳述している。

この両思想家の著作集の紹介が十分になされるならば、日本のスペイン思想の研究者にとって新しい観点が開かれるといっても過言ではないと思われる。というのは、この両者は一方では共通な要素をもちながら、他方それぞれの著作をみると、そこには両者の対照的な気質が反映しており、その微妙な共感・反発の中から現代スペイン思想が形づくられていったとも見ることができるからである¹⁹⁾。

このようにマタイスは、オルテガとウナムーノの関係性について比較研究することはオルテガについての理解を深めるために大きな重要性を持つだけでなく、現代スペイン思想を理解するためにもきわめて重要であると考えていた。現代スペイン思想が両者の共感と反発によって形作られたのならば、現代スペイン思想を研究することはひいてはさらなるオルテガ理解へと帰結することは疑うべくもない。オルテガとウナムーノの関係性という、それまでの日本にはなかった新たな研究

視点の提示は非常に重要な意味を持つものであったといえよう。

5. 結論に代えて

オルテガ思想がどのように日本で受容されたかについて、1956年から1975年までに期間を限定してその流れを追ってきたが、最後に、この過程で明らかとなった点を要約して本論考の結びとしたい。

まず、オルテガが初めて日本に導入された1936年から1955年までの流れと1956年以降の流れを照らし合わせてみると、大きな変化があることを指摘したい。その変化とは、オルテガ研究が著しい進展を遂げたことである。1936年からの20年間、オルテガ研究の中心となったものは、人物紹介、彼の思想の包括的紹介、そして『現代の課題』や『大衆の反逆』といった、数点に限定された彼の著書の翻訳、及びそれらの紹介であった。しかし、この20年を経た、1975年までの次の20年間に目を移すと、オルテガ研究はオルテガがもつ、幅広い思想分野の認知にとどまらず、それぞれの分野を対象とする研究が進みはじめた。また、直接的にオルテガ思想を扱う論文以外にも、その名が登場するようになり、多方面においてオルテガ認知が進みはじめた時期であった。同時に、オルテガ著作が次々に日本語へと翻訳され、主要な作品やエッセイなどに日本語で接する環境が整ったのもこの時期のことであった。

次にこの期間のオルテガ研究の特色について指摘しておきたい。

この期間におけるオルテガ研究の最大の特色は、オルテガ思想の幅広さが認知されたことであろう。これは先の20年にはなかった大きな変化である一方、この先、多くの人々がオルテガ研究へと向かう契機がこの時期から始まったことが明らかとなった。前期間を含

18) マタイス, A. 『ウナムーノ, オルテガ往復書簡』, p.229.

19) 同上, p.229.

め、この期間までに明らかとなったオルテガ思想の分野を挙げてみると、哲学、思想、歴史学、社会学、教育、大学論、芸術、文学、倫理、人間学などがあるが、分類としては粗略であるため、さらなる検討が必要である。

最後にこの期間におけるオルテガ研究の成果について指摘しておく。

まず、研究者たちによる翻訳活動はこの時期の大きな成果である。すでにみたとおり、この時期の研究者たちの尽力によって、オルテガの主要作品は日本語で接することが可能となった。これはその後の人々の間にオルテガの名が広まっていくためには、欠かせない要件である。また、前期間の20年がオルテガの名を広めることに費やされたのに対し、この期間はオルテガ思想への研究が本格的に開始され、進展した20年であったといえよう。すでに述べたとおり、オルテガ思想の幅広さが人々に認知されたが、それは同時にオルテガ思想の外枠が限定され、内部となるそれぞれの分野へと視点に移り始める段階に差し掛かったともいえる。ひとつひとつの分野の深さを探る研究はその後の研究に委ねられることになる。

参考文献

- 千代田謙「歴史主義の三途—クローチェ・ホイジンガ・オルテガ」『広島商大論集』法文編13(2), 1973年, pp.1-60.
- 遠藤恒雄「ベラスケス初期作品の一考察—ボデゴネス 絵画の意義」『美学』21(2), 1970年, pp.21-47.
- 原 佑「ホセ・オルテガ・イ・ガセットの思想」『哲学雑誌』71 (732), 1956年, pp.1-26.
- オルテガ, J., 池島重信訳『現代の課題』刀江書院, 1937年.
- , 樺 俊雄訳『大衆の蜂起』東京創元社, 1953年.
- 桑木巖翼「西班牙の思想家ホセ・オルテガ・イ・ガセット」『丁西倫理会倫理講演集』403, 1936年, pp.45-64.
- マタイス, A., 神吉敬三訳「初期オルテガ哲学の形成—フリアン・マリアスの新刊書『オルテガ—1・環境と使命』をめぐって」『ソフィア』11 (2), 1962年, pp.169-179.
- 「オルテガの大学論に就いて (特集・大学論)」『実存主義』47, 以文社, 1969年, pp.47-55.
- , マシア, J.編 佐々木孝他訳『ウナムーノ, オルテガ往復書簡』以文社, 1974年.
- , マシア, J.著『ウナムーノ, オルテガの研究』以文社, 1975年.
- 宮澤康人「アメリカ教育史像の再構成に向けて: 60年代・70年代アメリカの教育史研究」『東京大学教育学部紀要』14, 1975年, pp.1-17.
- 奥村家造「Critique of Vital Reasonの一側面」『立命館文学』144, 1957年, pp.360-376.
- 大谷恵教「民主政治の精神的条件と“公共の哲学”」『早稲田社会科学』15, 1976年, pp.27-53.